

## 「酪農こそ私の生きる道」

愛媛県立野村高等学校  
畜産科 3年 城戸 美博

私の住む愛媛県大洲市は県南部に位置する農林業を基幹産業とした町です。わが家は祖父が始めた酪農を叔父が継いでおり、現在搾乳牛39頭、育成牛17頭、計56頭を飼育しています。

私は小学校4年の時に親の仕事の都合で栃木県から愛媛県へ一家転住してきました。大洲に住み始めてからは毎日祖父のいる牛舎に行くのが楽しみで、小学校5年生からは自分の体重の10倍以上もの牛を引いて乳牛共進会にも参加してきました。そして、「将来は牛飼いになる。」という強い夢を抱いて、自宅とは遠く離れた野村高校畜産科の門をくぐりました。

「酪農家になるためだったら何にでも取り組んでみよう。」その気持ちの証として私は次のようなことにチャレンジしてきました。

最初に取り組んだことは学校の牛舎での実習です。朝は7時頃から学校が始まるまでの約1時間、放課後は約2時間、子牛の哺乳や除糞といった管理をずっと続けています。初めの頃はなかなか作業にも慣れず、先生の指示通りにできないこともたくさんありましたが、今では育成牛3頭の管理を完全に任せてもらって、体調管理はもちろん飼料設計までやらせてもらっています。

二つ目は家畜人工授精師の資格に挑戦しました。「繁殖なくして酪農は成り立たず」と言われるくらい酪農を行う上で繁殖は最も重要なことです。1月21日、愛媛県畜産研究センターで分厚いテキストを使つての講義が始まりました。まだ、学校では習っていないホルモンの名称や効果など、難しい専門用語が並び、学校に戻って先生に聞いてやっと理解するという毎日でした。講習会後半は、毎日「人工授精実習」でした。直腸検査といって牛の肛門に手を入れ、子宮や卵巣を触診するのです。最初に糞を手で掻き出し、手を奥まで伸ばしていきます。冬だったのでそのぬくもりはよかったです。私の場合、触診はおろか、子宮頸管や卵巣を見つけるまでに時間がかかり、完全に手がしびれてしまったこともありました。2月18日、講習会最終日、学科試験の日です。試験はすべて内容を系統立てて文章化しないとイケません。私は覚えていることを必死で組み立てて答えにしようと努力しました。数日後、試験結果が届き、私はどうにか合格することができました。

三つ目は牛を見る目を養えたことです。野村高校は乳牛改良に積極的に取りんでおり、平成17年度には「全日本ホルスタイン共進会・栃木大会」にも愛媛県代表として出場しました。私は1年生の9月、先生から「今度の共進会にはこの子牛を出すけん、お前が引っ張れよ」と言われました。子牛といっても体重は300kgもあり、思うように最初は歩いてくれません。先生にロープの持ち方、顔の持ち上げ方、きれいに見せるコツなどを教えてもらい、毎日、

放課後の1時間を練習に充てました。共進会当日は多少は緊張したものの、子牛は練習通り、リラックスして歩いてくれ、上位入賞を果たす事ができました。このように地域の共進会に参加することにより、いい牛をたくさん見ることができ、家畜の審査にも興味を持った私は農業クラブの家畜審査競技県大会にも出場しました。酪農家を何軒も廻り、数多くの牛を見ることによって今まで見えなかった部位の特徴が少しずつわかってきました。競技の結果は優秀賞と目標としていた最優秀ではありませんでしたが、牛を見るポイントがつかめたことは私にとっての何よりの財産となりました。

そして、私の高校生活最大の収穫、それは2年生の9月、10日間の「北海道ファームステイ」に行けたことです。私が入った牧場は道南の黒松内町、二階堂牧場でした。搾乳牛53頭、飼料園は60haと北海道では中規模の酪農家ですが、よく管理が行き届いた目を見張る牛がたくさんいました。実習は朝は5時から搾乳や餌やりで始まり、昼間は育成牛の管理など、夕方搾乳があり、すべてが終わるのは夜8時という毎日でした。

実習で一番大変だったのがサイロ詰めでした。私がお世話になった9月下旬は北海道ではちょうどデントコーンの刈り取り時期でもありました。高さ20mのタワーサイロの中に入り、ブローで吹き上がってきたコーンをフォークでならしながら踏んでいきます。吹き上がってくるコーンは絶え間なく、早くならさないとすぐに山になってしまいます。しかし、徐々にサイロの頂上が近づき、最後までコーンが入りきった時は何とも言えない達成感がありました。

また、ファームステイの一番の思い出となったのが北海道ナショナルショウという大きな舞台で二階堂牧場の牛をリードさせてもらったことです。これまで県内や四国での共進会は経験していましたが、国内で最もレベルが高いと言われる北海道での乳牛共進会にまさか自分が参加できるとは夢にも思っていませんでした。大会前日に会場入りし、夜中も牛体が汚れないようにこまめに除糞をしたり、ほとんど寝る間もなく牛の世話をしました。そして、いよいよ自分がリードする第3部（生後14ヶ月以上16ヶ月未満）・未経産ジュニアミドルクラスの審査が始まりました。手入れを念入りに行い、待機場で待っている時はあまりの緊張でプレッシャーに押しつぶされそうになりました。「この牛を何とか入賞させたい。」その一心で舞台に上りました。極度の緊張の中、それでも審査員に集中し、牛をきれいに見せるように全力を尽くしました。しかし、序列決定になってもなかなか審査員は私の牛を呼んではくれず、結局3等賞に終わってしまいました。

残念な結果でしたが、ご主人は笑顔で迎えてくれました。申し訳ない気持ちでいっぱいでしたが、この貴重な体験を無駄にせず、次に生かそうと心に誓いました。

このように3年間、畜産科でしかできない様々な体験をさせてもらい、酪農家になる土台をしっかりと築くことができました。私は高校卒業後、北海道に酪農研修に行き、その後は愛媛に戻り、叔父の後を継ぎ、以下ような酪農経営をしたいと考えています。まず、現在の

---

酪農は飼料価格の高騰のため、かつてない厳しい経営を強いられています。原因はアメリカでバイオエタノールの開発が進み、飼料用トウモロコシの入手が困難となったことや天候不良による乾草の不出来などいろんな要素が絡んでいます。そこで、私は将来酪農経営をするにあたり、飼料自給率を50%以上に増やしたいと考えています。そのために水田裏作や耕作放棄地などを有効に活用し、さらに省力化を図るためにラップサイレージも導入したいと考えています。また、私の人工授精の技術を生かし、自家産牛の能力向上を図りたいと考えています。乳房と肢蹄の改良を基本に5～6産までは健康に搾ることのできる長命連産の牛を作っていきます。

私には大きな夢があります。それは自分の手で作り出した牛が、全日本ホルスタイン共進会の舞台に立つことです。「酪農こそ私の生きる道」、夢の実現に向けて牛歩のごとく前進していきます。

---